

図書館随想

浅井恒雄

はじめに

2003年8月20日～21日の2日間、私立大学図書館協会第64回総会・研究大会が法政大学市ヶ谷キャンパスで開催され、全国の私立大学図書館から約430名の参加があり、総会、研究発表、報告、学術講演、シンポジウム等、盛りだくさんの催しが実施された。

私はこのような全国規模の大きな会に参加したのは本当に久しぶりで、研修や懇親会を通じ、大学図書館の現状や直面する問題点等について、各大学の図書館員のナマの声を聞くことができ、自身にとってたいへん有意義であった。また、この総会のなかで、大学図書館に30年間勤務した者が、永年勤続者として協会より表彰を受けるセレモニーが毎年行われており、今回は全国から35名の方が表彰された。本学では2名の該当者があり、私もその内のひとりにあたるということもあり、今総会・研究大会に参加させていただき、表彰の荣誉に浴した。

については以下、総会・研究大会のこと、そして長年の図書館勤務を振り返って思い出すままに綴ってみようと思う。

私立大学図書館協会 第64回総会・研究大会について

表彰式は、2000年4月に竣工された地上122m、27階建てのボアソナードタワーの26階で昼食会を兼ねて行われ、会長校である早稲田大学の紙屋敦之図書館長から表彰状と記念品をいただいた。当日は天候も良く、会場からは東京都が一望でき、素晴らしい眺めであった。ボアソナードタワー内には、教室、研究室、演習室、実験室、会議室、学生ホール、食堂等の諸施設が備えられており、14階にある展示室では、「世界の中の能 外国人の能楽研究」というテーマで、主に法政大学が所蔵する80点余りの貴重な資料が出品されていた。関西の大学ではこのような高層ビルを擁した大学を私は見たことがない。幾つかの大学での高層化については、聞いてはいた

が、実際に目の当たりにすると、いくつもの建物やグラウンドがキャンパス内にある、というこれまで自分が持っていた大学のイメージとは異なり、その斬新さに驚いた。そしてそこには、限られた広さのキャンパスを最大限に生かすという都心の大学ならではの工夫があった。

研究大会では以下の二つの研究発表が印象に残った。一つは流通科学大学附属図書館からの発表で、CRM (Customer Relationship Management: 顧客に関する情報を収集・分析し、顧客ごとに適切なアプローチを行うこと) によって長期的視点から良好な関係を築いて自社の顧客として囲い込み、収益率の最大化を図るマーケティング手法: 『現代用語の基礎知識2004』より引用) を応用して、大学図書館と顧客(利用者)との関係を強化しようとする試みである。もう一つは桜美林大学図書館からの発表で、全国平均を下回っていた同図書館の貸出冊数を増やすために、「利用者重視の読書理論」(読者への幅広い選択肢の提供)に基づき、主要新聞に紹介された図書を一括購入し、購入した図書の表紙画像と解説を図書館Webにリンクさせ、広報に用いて利用者へアピールした。その結果、貸出冊数が大きく増加した、というものだった。

何れの発表も、如何にして図書館の利用者を増やし図書館をもっと身近に且つ有効に活用してもらうことができるか、という図書館の永遠とも言える課題に対して、年々大学を取り巻く環境が厳しくなる状況のなかで、危機感を持って新しい取り組みにチャレンジする強い姿勢が感じられた。

それにしても今総会・研究大会を通じて改めて思ったことは、IT化社会の中にある現在、図書館サービスも例外ではなく、コンピュータを利用せずには考えられなくなっていることである。私が関西大学に就職してすぐに図書館の仕事に就いた1972年当時、本学の図書館サービス業務はまだ全く機械化されていなかった。蔵書の検索手段はカード目録か冊子目録であったし、貸出管理も利用者が貸出手続きの際に図書の請求記号、登録番号、書名、著者名等

と学籍番号(所属)氏名を記入した館外貸出票により行っていた。ITを駆使した現在の図書館サービスと当時のそれを比べると、まさに隔世の感がするが、千里山本館(現簡文館)は、現在の総合図書館にはない重厚さとアカデミックな雰囲気をたたえていた。

千里山本館で思い出すこと

1 カード目録

1972年当時の図書館は、千里山キャンパスに千里山本館、専門図書館(現円神館)及び臨時社会学部閲覧室があり、当時夜間授業が行われていた天六学舎には天六分館があり、3館1室で構成されていた。千里山本館は全学部に通ずる資料並びに法学部・文学部・社会学部に所属する利用者のための資料を、専門図書館は主に経済学部・商学部・工学部に所属する利用者のための資料を中心に収集、利用提供していた。臨時社会学部閲覧室は1967年に社会学部の学舎である第4学舎のなかに設置され、主に社会学部学生用の学習用図書を配架し、利用に供していた。そして天六分館は、天六学舎で学ぶ第一部学生が利用するための資料を主として収集し、利用されていた。これらの図書館・閲覧室の機能は、天六分館を除き、1985年の総合図書館の創設により、総合図書館に移された。また、天六分館も1994年4月、第一部の千里山キャンパスへの移転と同時に総合図書館へ機能が移された。

私が初めて図書館に配属された所は千里山本館の中にあつた運営課であつた。運営課の業務は、資料の利用サービスを行う係(学部学生・大学院学生に貸出やレファレンスサービスを行う奉仕係と学外相互利用並びに教員に貸出・レファレンスサービスを行う教員奉仕係)と個人研究費による図書購入等の業務を行う個研係、図書館の施設管理・庶務等の業務を行う庶務係に分かれていたが、私は奉仕係の担当になった。2階にカウンターがあり、そこで書庫図書の貸出・返却とレファレンスの受付等の業務を行っていた。そして、同じ階には円形をした開架閲覧室があり、室内の中央付近から放射線状に書架が備え付けられ、書架の間に閲覧机が置かれていた。そこには3万数千冊の学習用図書が配架されていて、知的スペースとして大いに学生に利用され、親しまれていた。また、同じフロアーには自習室である一般閲覧室があり、その奥には小さな休憩室が設けら

れていた。一般閲覧室には新聞専用の閲覧台があり、カウンター係員が当日の主要新聞を開館前に閲覧台にセットしておくのが開館準備の仕事の一つとなっていた。また、蔵書を検索するためのカード目録を備えた目録室が2階カウンターの向かい側に設けられていた。目録カードは和洋別に著者名目録、書名目録、分類目録の3種類があり、著者名目録と書名目録はそれぞれアルファベット順に配列され、和書についてはローマ字されたヘディングがタイピングされており、検索しやすいように工夫されている。書名や著者名が特定されていない資料を探すときは、日本十進分類法に基づいて分類され、同じ主題の資料が集まるように分類記号順に配列された分類目録で検索できるようになっていた。当時、蔵書の検索手段はほとんどがカード目録であり、学年末試験時や卒業論文の追い込み時期の晩秋には多くの学生が目録カードを繰って必要とする図書のカードを懸命に探していた光景が思い出される。

総合図書館がオープンした当初、開架閲覧室の図書は目録カードを廃止して端末機で検索するようになっていたが、書庫図書の検索についてはまだカード目録が主流であった。しかし、書庫図書のデータ化が進み大部分の蔵書が端末機で検索できるようになっていくのに伴い、カード目録を引く利用者は減っていき、ついに平成5年度をもって新規受入図書の目録カードの作成を凍結することになり、今に至っている。現在ではカード目録を検索する利用者はほとんど見かけることができなくなり、広いスペースの目録カードボックスに誰も人がいない光景を見ると、長年慣れ親しんできたものが使われなくなった寂しさと、近い将来に撤去されるであろう目録カードボックスの跡をどのように有効利用できるかという思いが錯綜する。

カード目録で忘れられないことのひとつとして、本学に就職してまだ間もない頃だと思うが、学費値上げによる紛争が起こった年に学生の学内への立ち入りが禁止された。ちょうどその頃、学年末試験が行われるときであったが、このような学内状況のため、急きょレポート試験に切り替えられた。このため、図書館からカードボックス及び貸出機に必要な物品一式をトラックに積んで名神高速道路上の駐車場まで運び出し、風雨を避けるためにテントを張って電話も置き、臨時の図書館カウンターを設けた。そして、請求のあった資料を30分おきぐらいに図書館から臨時のカウンターへ運び出して利用者に貸し

出していたように記憶している。石油ストーブを焚いているとはいえ、最も冷たい時期の屋外である。厳しい寒さのなか、レポートに役立つ資料を求め、学生達は根気強く目録カードを繰っていた。ようやく必要な資料を見つけて、貸出手続ができた学生はよいが、なかには、長い時間待ったあげくに請求した資料が行方不明になっていたり、貸出中であることが判明したりで、結局借りることができなかったケースもしばしばあり、食ってかかる学生もいて対応にたいへん苦勞したことを覚えている。

2 書庫

千里山本館の書庫は、地上6階建てで、1928年の竣工以来、増加し続ける図書館資料に対応するため、1967年までに2回の増築が行われ、2回目の増築部分に地下1階も設けられた。しかし、館内には空調設備がなかったため、冬と夏は書庫内での仕事は厳しかった。夏季休業期間中に書庫内図書の棚卸作業を5階、6階で行ったときの蒸し風呂のように暑かったことや真冬での図書の配架作業の、冷凍室に入ったような冷たさは忘れられない。また、書庫内は湿度が高く、資料の劣化を防ぐために除湿機を各階に置いていて、溜まった水を毎日1～2回捨てるのが日常業務のひとつになっていた。

利用者から書庫内図書の請求があれば、現在のよう書庫担当の係員がいなかったため、カウンター係員自らが書庫へ入り、資料を探しに行き利用者へ資料を貸し出す方式をとっていた。学年末試験期間等の利用の多い時期には1日に何十回もカウンターと書庫の間を往復して、1階から6階にかけて配架されている書庫内資料を階段を上り下りして探しに行ったが、若かったせいか、ひどい疲れを感じた記憶は残っていない。

さて、本館書庫も増え続ける図書館資料に伴い、既に私が勤め始めた頃から書庫の狭隘化の問題を含め、新図書館建築の必要性の声が挙がってきていた。その後、1984年に待ち望まれた現在の総合図書館が竣工、翌年4月に開館するが、その総合図書館の書庫も創設20年を迎えようとしている現在、資料の激増により配架スペースが狭隘化し、その対策が大きな課題となっている。書架の増設、置き換えが可能な資料の電子メディアへの転換等、図書館として考えられる限りの方策を講じてきたが、抜本的な解決には至っていない。このため、湿度等の問題があり、決して資料の保管に適しているとは言えない簡文館

へ総合図書館の所蔵資料の一部を別置せざるを得ない状況になっている。

3 雑誌業務の電算化

本学の図書館業務の電算化に着手したのは、1977年1月に各課・室職員中9名をもって図書館業務機械化プロジェクトチームが編成されてからであった。以来、図書館業務のトータル化を目ざし、第1段階として利用者の要求度が最も高い学術雑誌の総合管理システムの機械化から取りかかることになった。同プロジェクトチームは同年4月に図書館機械化実行委員会と図書館機械化グループに改組された。私は運営課に所属してカウンター業務を担当していたが、図書館機械化グループの一人として機械化業務に専念することになった。機械化グループでは、総括責任者である藤井収元閲覧参考課長のもとに、葛馬寿秀現学術情報局長と船越一英元図書館次長が中心となり、雑誌業務の機械化に渾身の力を込めて取り組んでこられ、学術雑誌の総合管理システムKULPIS (Kansai University Library Periodicals Information Systems) を外部委託ではなく、自館で完成され、本学図書館の発展に大きな足跡を残された。

私は主にデータ管理と業務記録を担当していて、新規に受け入れた雑誌のデータを作成したり、誌名の変更等のデータ修正や廃刊等によるデータの削除等を行い、これらをマスターファイルに追加・修正等を行っていた。また、当時、プログラムやデータの作成はパンチカードに文字や数字を専用のパンチ機に打ち込んで穴を開ける方法によって行っていた。また、直径が20～30cmもあるMagnet Tapeも当時の主な記憶媒体のひとつであった。しかし、これらの媒体を読み込む機械は工業技術研究所の中にあつた電子計算機室にしかなく、図書館と電子計算機室の間を1日に何度も往復したものだつた。

天六分館時代

私は、1981年4月から1985年3月の間、第 部学生が学ぶ天六学舎の中にあつた天六分館へ配属された。

天六分館は、学舎の中の4階にあり、閉架式の書架に約8万5千冊と開架式の書架におよそ1万5千冊の蔵書を擁していた。天六学舎では夜間授業が行われていたため、天六分館では、授業期間中は午前

1978年3月末における本学図書館の蔵書数・座席数 (『技苑』第24号 P.24より転載)

| 区 分 | 蔵 書 構 成 | 蔵 書 数 (冊) | 閱 覧 室 | | |
|-----------|--|--------------|-------|-------|---------|
| | | | 種 類 | 座 席 | 図 書 (冊) |
| 千 里 山 本 館 | 教養関係図書 法・文・社会学部関係専門図書 | 526,000 | 一般閲覧室 | 228 | |
| | | | 開架閲覧室 | 150 | 36,000 |
| 専 門 図 書 館 | 経済・商・工学部関係専門図書 (含工学部基礎専門・産業) 社会学関係 | 280,000 | 開架閲覧室 | 352 | 26,000 |
| 天 六 分 館 | 教養関係図書 各学部関係専門図書(第2部) | 98,000 | 一般閲覧室 | 138 | |
| | | | 開架閲覧室 | 60 | 15,000 |
| 臨時開架閲覧室 | 教養関係・社会学部基礎専門図書 | 11,000 | 開架閲覧室 | 108 | 11,000 |
| 合 計 | | 915,000 | | 1,036 | 88,000 |

注 開架閲覧室備付図書数は蔵書数の内数

9時から午後9時30分まで開館していた。また、日曜日でも午後1時から午後8時まで開館し、とくに130席あまりの座席数があった一般閲覧室(自習室)は、勤労学生や司法試験の合格を目指す校友等でおおいに利用されていた。因みに当時の千里山本館では、授業期間中の平日の開館時間は午前9時から午後8時までで、日曜開館は実施していなかった。

カード目録は、天六分館の蔵書検索用と千里山本館の蔵書検索用とに分けて備え付けられていた。カード目録を検索して、千里山本館の蔵書を天六分館で利用したいときは、現在、総合図書館と高槻図書室の間で相互利用を行っているのと同様に、両キャンパス間を毎日行き来していた学内便により千里山本館から希望する資料を取り寄せるサービスを行っていた。取り寄せ希望の資料の連絡は、電話により行っていたため、洋書や資料が多いときは時間を要し、けっこう大変であった。

天六分館にいて困っていたこととしては、書架スペースが限られていたため、千里山本館に比べ、蔵書数、とくに参考図書の数が少なかったことである。基本的なものはおよそ揃っていたが、研究用の参考図書は少なかったため、専門的な参考質問を利用者から受けた場合に、千里山本館から資料を取り寄せたり、同館係員に調査を依頼して対応していた。これは、1994年4月に総合情報学部の創設とともにサービスを開始した高槻図書室も同様であったが、現在では、電子メディア資料の増加やインターネットの発達等により、次第に解消されつつあると思われる。

おわりに

総合図書館の創設から早や20年が経過しようとしているが、春休み中の先日、図書館のガイダンスで館内を案内しつつ歩いていると、穏やかな日の光が閲覧室に入り、図書館のなかは実に美しく清潔感があり、吹き抜けは開放感にあふれ、閲覧座席の空間も広々としていて、何とも言えない心地よさを感じた。書庫の配架スペースこそ不足するようになったが、利用者スペースは総合図書館がオープンして以来、快適さを保ち続けている。むしろオーディオスピーカーの購入間もない頃の音の硬さが、いつしか取れてきて、次第に滑らかな音になってくるように、ある種の落ち着き、安定感のようなものが醸し出されている。このような図書館を、より高度なサービスが求められている利用者サービスの中味についても誇れるものにするよう、現在推進している平成10年12月1日に定められた「関西大学図書館がめざす方向」としてのビジョン7項目を踏まえて、今後とも研鑽を積み、自分なりに精一杯取り組んでいきたい。

参考文献

- ・船越一英「『関西大学百年史』とともにみる図書館の復興と拡充」(『関西大学図書館フォーラム』第3号 1997年)
- ・関西大学図書館機械化グループ「関西大学図書館業務機械化の実際 - 学術雑誌管理システムを中心に - 」(『技苑』第24号 1979年)

(あさい つねお 閲覧参考課)